

28PA-pm064

若年層の皮膚炎に及ぼすアレルギー素因と環境因子に関する研究

○黒崎 麻由¹, 芥川 陽美¹, 高石 雅樹¹, 浅野 哲¹ (1国際医福大薬)

【目的】近年、乳児～20代の若年者におけるアトピー性皮膚炎、喘息などのアレルギー性疾患が増加している。そこで本研究では、本学の学生を対象に調査をし、10代後半及び20代前半の学生の多くが悩みを抱える皮膚疾患に対するアレルギー素因や環境要因の因果関係を解析し、疾患に対するより適切な対策や予防法を検討した。

【方法】本学の学生に対してアンケート調査を実施(配布時期2014年9月)し、実際に若年者の健康状態や家族性アレルギーの罹患率、アレルギー性皮膚炎の悪化因子や罹患者の肌質などの情報を収集し、遺伝及び環境要因関連を解析した。

【結果及び考察】アンケートの回収率は約65%(661人/1005人)であった。本学学生で健康状態は良好であると答えた人は、アレルギー性疾患がない人で約70%なのに対し、アレルギー性疾患がある人では約50%、アレルギー性皮膚炎がある人では約40%であった。アレルギー性疾患をもつことは本人が感じる健康状態に負の影響を与えていると考えられる。家族がアレルギー性疾患を持つ人は、自身にアレルギー性疾患がある人のうち約70%であるのに対し、自身にアレルギー性疾患が無い人では約40%であり、遺伝的素因がアレルギー性疾患の罹患率に影響していることが示唆された。アレルギー性疾患のうち、代表的な皮膚疾患であるアトピー性皮膚炎の罹患者のうち、現在軽快したのは約50%で、その原因として最も多かったものは“無処置”、次いで“薬物治療”であった。症状が悪化したとの回答は約10%で、そのうち約50%が原因として“ストレスの負荷”を挙げている。アトピー性皮膚炎の症状は成長により多くは寛解傾向を示す例が多いため、それに関する要因については現在調査中である。